

早稲田大学審査学位論文  
博士（人間科学）  
概要書

自身の言葉による  
環境評価に関する手法研究

Methodology for Environmental Evaluation  
Using Subjects' Own Term

2020年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科  
彭 博  
PENG, Bo

研究指導担当教員： 小島 隆矢 教授

本研究では、建築環境学とくに建築環境心理分野において独自の発展をみせている「その人自身の言葉による環境評価」に関する手法について、さらなる発展に資するために手法研究を行う。

まず研究背景として、当該分野の環境評価研究の流れを手法面から述べる。嚆矢となる研究はSD法による印象評価という定量調査であったが、評価グリッド法の提案により「その人自身の言葉」による評価の視点を抽出する定性調査が重要視された。さらにキャプション評価法、のだから法等の応用展開、定量調査においても「その人自身の言葉」を用いる個別尺度法の提案などの展開がある。定性と定量を行き来しつつ「その人自身の言葉による環境評価」に関する手法が独自の発展をみせてきたといえる。

次に、以上の背景に関する本研究の視点を述べる。定性調査に関して、評価グリッド法の普及・活用が進むとともに、キャプション評価法、のだから法などの新手法が登場している。また評価グリッド法自体が心理学分野のレポートリーグリッド法を源流とし、さらにそのレポートリーグリッド法にも様々な技法がある。手法が多様化し、様々な工夫・改良が施されるのはよいことだが、手法間の違いや工夫・改良が調査結果に及ぼす影響ほどの程度か、実証的検討が不十分なまま、手法の提案・活用のみ進んでいる。

個別尺度法は「その人自身の言葉」を評価項目として評価データを得る「定性定量調査」といえる。適用事例や技法のバリエーションが徐々に増えているという点は上記「定性調査」と同様であるが、評価グリッド法ほどには普及していないため、いくつかの提案や試みは見られるものの、方法論的にまだ未成熟な段階であるように思われる。

これら「定性調査」「定性定量調査」は共通して、環境を評価する「その人自身の言葉」自体に個人差があるから、その個人差を尊重しようという主旨を標榜している。しかしながら、調査方法自体にこの主旨は取り入れられているとしても、論文等で調査結果として報告される内容を見る限り、明に「個人差」あるいは「集団差」を重視した形の出力や考察がなされることは意外に少ない。

以上に述べた問題意識に基づき、本研究の目的を次のように設定する。

- ・「その人自身の言葉」として環境評価項目を抽出する「定性調査」に関して、「評価グリッド法」を中心とする3つの手法について比較し、手法間の差異・特徴を把握する。
- ・「その人自身の言葉」を評価項目とする「定性定量調査」である「個別尺度法」に関して、（上記「定性調査」に関する検討には含まれない部分として）個別尺度を用いて評価を行う際の測定法に関して、共通尺度法との違いもふまえつつ検討を行う。
- ・「定性調査」「定性定量調査」に共通して、「個人差」「集団差」をより積極的に扱うことができる方法論に関する検討・提案を行う。

本研究は7章構成であり、以下、各章の内容について述べる。

第1章「研究背景と目的」および第2章「本当対象手法に関わる本研究の視点」は序論である。研究の背景と目的を述べ、検討課題を4つ設定した。

第3章～第6章が本論であるが、この順に課題1～課題4を検討した。

第3章「課題1：評価項目を抽出する定性調査手法に関する検討」では、評価項目自体を抽出する定性調査手法に関する検討を行った。これまでに述べた背景・現状から、当該分野において最も普及・活用が進んでいる評価グリッド法を中心に、関連する手法として、その源流であるレポーター・グリッド法、質問紙やインターネット調査による簡易化代替として適用例が増えている「のだから法」を検討対象とする。3つの手法を比較する調査分析を行ったところ、各手法における総合評価に対する説明力の大小関係は、大きい順に、評価グリッド法、レポーター・グリッド法、定型自由記述法という結果が得られた。

第4章「課題2：評価グリッド法におけるハイブリッド型の調査デザインの検討」では、評価グリッド法が本来有する「個人差を重視する」という特徴を極力損なわずに分析考察することを目的に、また課題1の結果を踏まえて、評価グリッド法と定型自由記述の長所を組合せた戦略的な調査法を提案した。調査手順としては、まず大人数への調査が容易な質問紙やWeb等による定量調査を行い、次にその結果をもとに評価グリッド法の調査対象者を計画的にサンプリング、そしてインタビュー調査を実施する。質問紙やWeb調査とインタビューという2種の調査モードから構成されることから、本提案の調査計画を「ハイブリッド型の調査デザイン」と名付けた。また本課題では手法の提案だけでなく、提案する手法の有用性を検討・実証しており、このことも大きな意義があると思われる。

第5章「課題3：個別尺度法および共通尺度法における測定法に関する検討」では、項目抽出と評価を同時に行える「グループ編成法」に着目し、その有用性を調べることを目的として、対象評価の部分を他の測定法と比較する検討を行った。グループ編成法の測定は、個別尺度を選択肢とするシングルアンサーに相当することから、同じ尺度によるマルチアンサーの測定を追加した結果と比較したところ、大差のない結果となった。一方で、共通尺度法（全員共通の項目を用いる通常の方法）におけるシングルアンサーとマルチアンサーも比較したが同じ結果とはならなかった。従って、「グループ編成法」のみがシングルアンサーに相当する唯一の有用な測定法であるといえる。但しグループ編成法の適用条件について「有用ではあるが万能ではない」ということを注記した。

第6章「課題4：個別尺度法による集団差（国際比較）の分析法に関する検討」では、国際比較研究における個別尺度法の応用可能性と、集団差の分析法に関する知見を得るため、日本人と中国人を対象にそれぞれの母国語を個別尺度として用い、すなわち「自身の・自国の言葉」を用いる調査を行った。個別尺度法による集団差の分析法としては、伊丹らの先行研究同様に正準相関分析を適用したが、より異質な集団間の比較であるため、単に正準相関係数の大小だけでは不十分であること、対応する軸間の散布図が示す相関パターンから有用な情報を得られることなど、方法論上の進展が得られた。

第7章「総合的考察」では、本研究で検討や提案を行った様々な手法・技法等が、建築環境に関わる実務的場面においてどのように活用できるのか、企画する商品はバスルーム、対象国は中国として、架空の商品企画ストーリーを示した。